

平成30年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業

(発達障害に関する通級による指導担当教員等専門性充実事業)

成果報告書

実施機関名（和歌山県教育委員会）

1. 問題意識・提案背景

本県においても通級による指導へのニーズは年々高まっている。教室数の増加に伴い、通級による指導を受ける児童生徒数は平成19年度と平成29年度を比較すると、5月1日現在で約4.2倍になっている。また、平成30年度からは高等学校における通級による指導を2校で開始することとなり、今後、小・中・高等学校とそれぞれの段階により専門的な指導体制の充実が求められるとともに、通級指導教室担当教員（以下、「通級指導担当者」）の人材育成、専門性の向上、また通級指導担当者を継続的にサポートする体制の構築が課題として挙げられる。

本事業に取り組むことにより、市町村教育委員会とともに通級指導担当者への効果的な研修プログラムを開発する。また、専門的な指導・助言ができるアドバイザーを配置し、拠点校を中心に通級指導教室の円滑な運営に係る実践研究を深め、これらの取組の成果をもって、県内全域の通級による指導体制の充実を図る。

2. 目的・目標

本県では、今後も通級による指導の対象となる発達障害の児童生徒が一定数増加傾向にあることが想定される。それぞれの発達の段階に応じて適切な指導が受けられるよう、教員の専門性の向上に係る研究に取り組むことが急務である。本事業では、同じ圏域にある中学校1校、高等学校1校を拠点校とし、対象となる生徒に対する適切なアセスメントに基づく目標設定や具体的な指導内容等の選定及び指導の工夫、評価方法、通常の学級との連携等について実践的な研究に取り組む。特に高等学校では、平成30年度からの制度化に伴い、県内でも指導を開始した。中学校と高等学校両拠点校間でネットワークを構築し、指導内容や方法について共有し、高等学校における通級による指導の充実を図る。これらの研究成果については、県内に発信する機会を設けるとともに、県内の通級による指導の充実に資することを目的とする。

3. 主な成果

【アドバイザーの配置】

本事業では、通級指導担当者に対して専門的な知見から指導助言を行う「通級指導アドバイザー（以下、「アドバイザー」とする。）」を配置した。アドバイザーには退職した元特別支援学校長に依頼した。アドバイザーは、県立高等学校等を支援する本県独自の施策による「学習指導支援員」として平成28年度から、県内の高等学校等に対して特別支援教育の観点から授業づくり等の指導を行ってきた。また、その中で、拠点校である有田中央高等学校が実施した平成29年度の文部科学省委託事業の実践研究にも尽力いただいた経緯がある。

本事業では、年間を通じ、アドバイザーが定期的に拠点校を訪問した。アドバイザーは通級指導担当者に対して、生徒の実態把握から対象生徒の抽出、中心的な課題設定、具体的な指導内容、通常の学級との連携等に的確な指導・助言をした。指導・助言内容は資料1に示す。

青年期の生徒の特性を踏まえ、実態把握には生徒が自分自身をどのように捉えているかという視点を取り入れたり、それぞれの学校の特色や持ちうる資源を有効に活用する方法等について、専門的な視点からの助言はその後の指導の成果につながるものであった。

資料1 アドバイザーによる具体的な指導・助言内容

実態把握（アセスメント方法、分析方法）	<p>(湯浅中)</p> <ul style="list-style-type: none"> 困っている状況チェックシート作成について、<u>設定項目や項目の意味についての指導</u>を行った。また、チェックシートの集計結果から、<u>生徒のつまずき（困っている状況）の背景原因</u>について協議を行った。 校内教育支援委員会に参加し、通級指導教室対象候補生徒についての、教科担任、担任、学年教員との情報共有への助言を行った。 <p>(有田中央高・湯浅中)</p> <ul style="list-style-type: none"> 通級指導教室対象候補生徒についての実態把握として、<u>中間テストからの誤答分析</u>を実施し、<u>生徒の誤答傾向</u>について助言した。
課題設定	<p>(有田中央高)</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象生徒の実態把握に関する情報から、個別の指導計画づくりを支援した。対象生徒自身が、自らを振り返るシートを紹介し、その使い方について指導した。
指導内容の選定	<p>(有田中央高)</p> <ul style="list-style-type: none"> 具体的な指導内容について、個別の指導計画の作成をとおして、<u>実態把握から、短期目標の設定方法</u>を考えるための指導を行った。指導の効果が確認できない時は、指導方法を変更すること、<u>卒業後の生徒の姿から見た視点で指導内容をとり入れること</u>を指導した。 対象生徒が、自分を客観視するため、自分の得意なことや不得意なことについて、本人との会話をとおして確認し、その振りかえりを行うよう指導した。その成果をもとに、具体的な指導分野について協議を行った。

また、元特別支援学校長の経験を生かし、通級指導教室運営における学校としての支援体制について、拠点校の管理職に対しても助言を行った。

これらの成果から、本事業の研究を進める上で、アドバイザーの存在は通級指導担当者を支える大きな役割を果たしたと考える。特に教科担当制である中学校・高等学校では、生徒の実態把握をする際に、チェックシート等により多様な視点から情報を収集できるが、集めた情報の分析等を行う際に、特別支援教育の指導経験の有無等により、困難さを伴う。的確な実態把握の実施やその妥当性の検証、指導内容の選定から具体的な授業づくりを進めていく過程において、外部有識者であるアドバイザーからの助言・指導は有効であった。

このことから、通級指導担当者の専門性の向上を進める上で、担当者一人一人の専門性を高める研修の実施と併せて、実践を進める通級指導担当者が相談したり、助言を求められる支援体制として、特別支援学校のセンター的機能の活用や発達障害者支援センター等、地域の専門機関との連携による包括的なネットワーク構築の必要性が改めて確認できた。

【通級による指導の充実を図るために】

通級による指導の充実を図るため、推進協議会を設置した。推進協議会は有識者（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センター主任研究員）、県発達障害者支援センターセンター長、拠点校管理職、拠点校所管市町村教育委員会指導主事、特別支援学校管理職、アドバイザーから構成した。

協議会では改めて、通級指導教室の役割について協議された。教員や保護者の中には、通級指導教室が通常の学級の中で課題の大きい生徒を取り出して指導する場や、補充学習をする場と誤った理解をしていることがある。特に発達障害等の生徒を対象とした通級指導教室の場合、集団の中で苦手なことに主眼が置かれ、通級による指導を開始し、課題の改善・克服に時間がかかり、通級による指導を受け続けている生徒もいる。通級による指導を受ける生徒は大半の授業は通常の学級で受けていることを確認し、通級指導教室と通常の学級のそれぞれの指導の役割を明確にすることが提案された。

また、今年度は湯浅町教育委員会の協力を得て、管内の小・中学校の特別支援学級・通級指導教室担当者会に有田中央高等学校の通級指導担当者が参加した。子供の成長の段階を共有し、通級による指導の在り方等について協議した。そのことを機に、担当者間で互いに授業を参観し、教材の共有や授業づくりの工夫の共有など担当者間での連携が進んだ。圏域ごとにこのようなシステムを構築することが通級指導担当者の専門性の向上に寄与すると考えられるが、そのためにも各校の管理職が自校に設置されている通級指導教室や通級指導担当者の役割をどのように考えるかが重要であり、管理職への研修機会を設けることについても意見が出された。

【通級指導担当者等の専門性向上に向けた研修】

通級指導担当者等の専門性向上を図るため、以下のとおり、研修会への参加及び先進県への調査を行った。

○平成30年度発達障害教育実践セミナー（主催：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所）

参加者：各拠点校通級指導担当者

○平成30年度 高等学校における通級による指導実践研究協議会（主催：兵庫県教育委員会事務局）

参加者：有田中央高等学校通級指導担当者

○横浜市立左近山中学校への調査訪問

参加者：湯浅町教育委員会担当者、アドバイザー、県教育委員会担当者

○平成30年度国立特別支援教育総合研究所セミナー（主催：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

参加者：有田中央高等学校長、アドバイザー

- ・本フォーラムでは、有田中央高等学校通級指導担当者が「発達障害に関するシンポジウム『通級による指導に期待されること～高等学校における在り方を考える～』」にシンポジストとして登壇し、実践発表を行った。

また、本事業では以下のとおり研修会を実施した。

○発達障害地域理解啓発フォーラム（主催：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所・和歌山県教育委員会）

参加対象：教員、保護者、福祉関係者等

- ・特別支援学校及び国立特別支援教育総合研究所による「自立活動」等に係る教材展示を行った。

（資料2）

・シンポジウム「つなぎ愛シート（和歌山県版個

別の教育支援計画）を活用した移行支援」では、子供が通級指導教室に通う保護者、有田



資料2 教材展示の様子

中央高等学校長、発達障害者支援センター長、市町村教育委員会指導主事がシンポジストとして登壇した。

※本フォーラムは和歌山県教育委員会が独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「平成30年度発達障害地域理解啓発事業」の協力機関（全国3機関）として、研究所と協働して開催した。

○合同研修会（主催：和歌山県教育委員会）

参加対象：通級指導担当者、市町村教育委員会指導主事、特別支援学校コーディネーター・アドバイザーによる「通級による指導が果たす役割と教員の専門性」と題した講義を行い、本事業から見える通級による指導の成果と課題について参加者に伝えた。（資料3）

通常学級の準備はできているのか
人にはかえってくる場所が必要

理解のゆっくりさや失敗をからかう雰囲気がない、お互いサポートし合うようなクラスづくり
クラス目標がある
字級づくり

1. 教師の教え方に生徒が合む
2. 生徒の学び方に教師が合む
3. 演習の学び方を準備する

1 チーム力で勝負
通級指導教室だけに思考を縮小しない

2 通級指導教室での取り組みを、通常学級、各教科の授業に生かす

3 制度ありきでなく、ニーズを全面に
10年先を見つめて

資料3 研修資料より

- ・有田中央高等学校通級指導担当者から、国立特別支援教育総合研究所セミナーでの実践発表及び報告を行った。
- ・参加者によるグループワーク①「教材・教具を共有しよう」、グループワーク②「お互いの専門性を高めるために」では、各グループに特別支援学校コーディネーターを配置し、専門的な視点から助言を行った。
- ・まとめとして、「通級指導教室に期待すること」と題して、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センター主任研究員 竹村洋子氏による講義を行った。

参加者アンケートより

- ・教材・教具の共有で「マンネリ化」を脱することができそうです。人とつながるというのは私たちにも大切なんだと感じています。来年度もぜひ、研修会を実施していただきたいと思います。
- ・今まで「つなぐ」ということを大事に考えてきましたが、今日の研修を通して、より丁寧に通級・通常の学級・保護者・各関係機関との結びつきを意識していけたらと思いました。
- ・子どものニーズやアセスメント、それにあわせた教材・教具や支援を考えていきたいと思います。チームで動きたい！そのためにも専門的な研修を充実して欲しいです。

4. 通級による指導における専門性のポイント

通級による指導担当者の専門性は以下のように考える。

- ・在籍学級における生徒の様子、学び方を把握する
- ・認知に応じた生徒のつまずきを的確に分析し、具体的な支援内容を計画する
- ・生徒の実態把握から、指導の重要度・実現度を加味して優先順位をつけ指導目標・指導内容を選定する
- ・中学生・高校生の発達段階や、生徒個人の心理面を理解した関わりができる
- ・通級による指導を学校の教育活動全般（教科指導や特別活動など）と結びつけた支援・指導を行う

今回の事業を実施するにあたり、中学校・高等学校における実践研究を中心に取り組んだ。当初の計画では授業分析を研究の柱と据えたが、通級による指導を実施するにあたっては、対象生徒の抽出（実態把握を含む）、目標設定から指導の実際におけるまでを校内で組織的に取り組んでいくか、が重要であると考え、一つ一つの手順を丁寧に取り上げ、アドバイザーから、専門的な指導を受け、専門性を高めるようにした。

湯浅町教育委員会の協力を得て、特別支援教育担当者会を開催したが、有田圏域の通級指導担当者にその取組を広げることができなかつた。合同研修会では、有田圏域の通級指導担当者でグループを編成し、協議できる機会を設け、今後、圏域で担当者が互いの実践を高め合う仕組みをつくる気運の醸成を図った。

5. 拠点校における取組概要

【学校種： 中学校】

①通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

[通級指導教室についての理解、啓発、広報]

4月 現職教育で、アドバイザーより、通級指導教室の在り方、指導内容、合理的配慮等についての講義を受ける。

5月 全保護者に、通級指導教室について次のような内容でプリントを配布した。

（資料4 通級指導教室の役割、対象となる生徒、指導内容等）（別添）

[実態把握の方法]

- ・小学校からの引継ぎを参考にしながら、通級担当者が通常の学級での授業を参観し、授業を受けている様子や学習の状況を確認
- ・「困っている状況チェックシート」（資料5）（別添）による情報収集
「困っている状況チェックシート」はアドバイザーの助言を受け、項目を整理した。それぞれの教科を担当者に授業中の様子等をチェックしてもらうようにし、多面的な情報収集に努めた。
- ・担任、学年所属の教員からの情報収集
- ・担任から家庭訪問等で出た保護者、本人の願い等を聞きとる
- ・定期テスト等の答案を分析
- ・特別支援教育コーディネーターの協力を得て、発達検査等の結果から認知特性を把握

[目標の設定]

- ・実態把握によって得られた情報から優先順位をつけ、特別支援教育コーディネーターと通級担当者で、通級での目標設定の案を作成。校内教育支援委員会を開催し、協議を行った。校内教育支援委員会は、校長、教頭、特別支援教育コーディネーター、特別支援学級担任、学習支援教員、該当生徒の学年主任、該当生徒の学級担任、通級指導担当者で構成し、必要に応じてアドバイザーの出席を求めることがある。
- ・通級による指導を開始して1か月を目途に、特別支援教育コーディネーターと通級指導担当者、アドバイザーで、指導についてのふり返りと再検討を行った。検討の視点としては、生徒の困っている状況に対して支援ができるか、通常の学級での授業の様子はどうか、とし、今後の指導のあり方について協議を行った。

[評価]

- ・生徒Aへの取組例
実態把握から導かれた「ある程度まとまりのある文を読んで、要点がつかめるようになる」を目標に、キーワードの抜き出しや絵での表現などを指導した。本人の所属する部活動のような生活に密着した内容では要点をよくつかめていたが、文学作品のように生活体験がない内容では、要点をつかむのには、ヒントが必要なことが多く、絵に表現することもまだできない。
- ・評価についての反省点は、指導の目標を立てたとき、評価の方法について十分に協議できていなかったことが挙げられる。年度途中から、1ヶ月後のふり返りを行うことで、指導目標と、多面的な評価の在り方について、取り組む実践ができつつある。

②通級による指導の担当教員が通常の学級の担任との連携を深化させるための専門性の在り方の研究

[担任および当該学年との連携]

- ・学級担任からは、小学校からの引継ぎ内容、学校生活や授業の様子、「クラブを頑張りたい」等の生徒の願いについて聞き取った。また、通級指導担当者が、通常の学級の授業を参観して生徒の状況を確認した。家庭訪問で得た保護者の願いや意向についても担任と通級担当者で共有を図った。
- ・学級担任が7月と12月に行った三者面談（本人、保護者、担任）の機会には、通級指導担当

- 者も一部同席し、指導内容や、生徒の様子などを話したり、保護者の意向の把握に努めた。
- ・学期末には、通級での指導の内容や、その様子、評価を文章で表記し、学級担任に伝えた。
これは、担任を通じて通知簿と一緒に保護者にも渡している。
 - ・通級による指導の目標設定のために、学級担任を含む学年所属職員と打合せを行った。そこでは、発達検査の結果から読み取った内容を共有したり、学年の職員から、生徒の授業での様子をはじめ、学級での様子、部活動の様子なども聞くことができた。

[職員間の連携]

- ・「困っている状況チェックシート」への協力を求め、集約した内容は実態把握のために役立てることができた。
- ・8月28日に、通級指導教室についての現職教育を実施した。アドバイザー、特別支援教育コーディネーターの協力を得て、それぞれの立場から通級指導教室での指導や生徒の様子、また、発達検査の結果の読み取りや必要と考えられる支援等について全職員に伝え、共通理解を図った。

[今後大切にしたいこと]

今年度の取組をふり返ると、アドバイザーの存在や、管理職を中心に学校として通級による指導の在り方を考えていただいたことにより、通級指導教室が孤立することなく、校内教育支援委員会を中心に組織的に連携することができた。しかし、会議の中では、「通常の授業についていくにくいのに、通級へ行っている時間ができると更に学習内容がわからなくなるのでは。」や、「通級から通常の授業に戻る難しさ」などの意見が出て、通級による指導について理解の共有を図ることの難しさを感じた。

これらをふまえて、今後次のようなことを大切にしていきたい。

- ・通常授業の参観を行い、認知特性から見た授業中の対象生徒の状況を関係職員に伝える。
- ・対象生徒の困っている状況を、該当学年をはじめ、全職員と共通理解する。
- ・通級での取組が、通常授業での指導の改善につながるよう連携を進める。

③発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法の研究

[基礎となる専門性のボトムアップ]

町内の特別支援教育担当者会が7月5日に開催され、町内の小・中学校（小学校3校、中学校1校）での情報交換ができ、指導する上で参考にすることができた。また、この会には有田中央高等学校からも通級指導担当者が参加、高校での取組についても知ることができた。町教育委員会としても、この会の有用性を感じている、と聞いており、今後も継続し、地域の中で互いの指導力の向上を図っていきたい。他にも、指導者としての専門性を高めるため、多くの研修会や講演会に参加してきた。例えば、次のようなものがあった。

- ・5月27日 和歌山県教育センター学びの丘「通級指導教室担当教員研修」
- ・8月3日 東京で開催された「発達障害教育実践セミナー」（主催：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所）
- ・10月21日 岩出市で開催された「発達障害地域理解啓発フォーラム」（主催：独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所・和歌山県教育委員会）
- ・1月21日 和歌山県発達障害者支援センター「ポラリス」の見学と資料の閲覧

[小・中・高等学校通級担当者間における授業参観と協議]

有田中央高等学校や湯浅小学校の通級指導担当者との担当者会の後、互いに授業を見せ合って、担当者間で協議を行った。担当者が互いに時間割を知らせ合って、都合のよい日時を選んだので、普段の授業を無理なく見せ合うことができた。授業後の協議では、使っている教材や工夫していること、悩んでいることなどを話し合うことができ、大変参考になった。

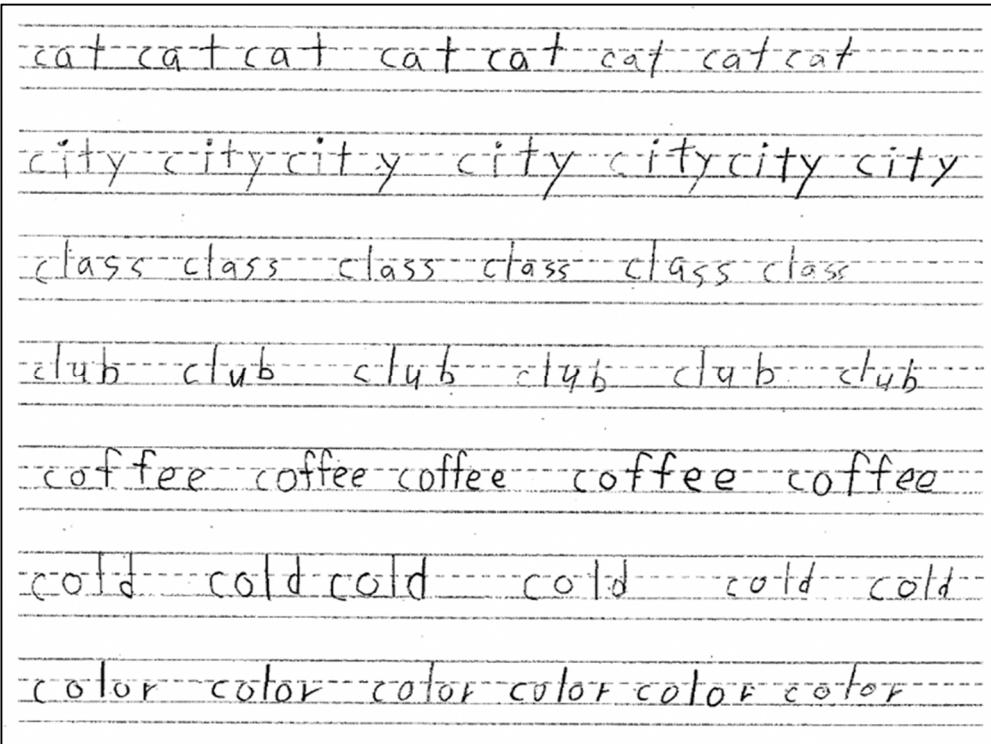
[校内授業研の実施]

校内授業研として、通級指導教室の研究授業と授業についての協議を行った。参加者は校長、教頭、特別支援教育コーディネーター、英語科担当者、養護教員、アドバイザー、県教育委員会指導主事、通級指導担当者であった。

研究授業で取り上げた生徒は英語（アルファベット）を書くことに困難があり、大文字と小文字や、似た形の文字の区別がつきにくいが、4本線を使うと、ほぼ正しく書くことができる。そこで、ワークシートの記入欄には、すべて4本線を入れて書きやすくした（資料6-②）。また、イラスト入りのカードを選んだり、文法に応じて、語順をカードで並べかえたりする活動もとり入れた。

No.	単語(英語)	意味	1	2	3	4	5
1	Cat	ネコ	Cat	Cat	Cat	Cat	Cat
2	City	市	City	City	City	City	City
3	Class	クラス	Class	Class	Class	Class	Class
4	Club	クラブ	Club	Club	Club	Club	Club
5	Coffee	コーヒー	Coffee	Coffee	Coffee	Coffee	Coffee
6	Cold	寒い	Cold	Cold	Cold	Cold	Cold
7	Color	色	color	color	color	color	color

資料6-① 通常授業の課題用紙に英単語を書いた場合



資料6-② 同じ生徒が、4本線のノートに英単語を書いた場合

授業後の協議では、生徒が単語の意味をイメージ化するためにイラストなどを活用することで、本人が自分に応じた学ぶ方を体得することが大切である、ということや、ほめることを意識すること、学習したことを自分で確認できるような教材の必要性等の意見が出ていた。

[具体的な指導実践例]

- ・自己理解：アドバイザーからの助言を受け、通級による指導を受ける生徒が自分のことをどうとらえ、通級による指導への意欲をどう感じているか、等自分自身を意識する活動を取り入れた。自己理解のためには、S S T関係の書籍からワークシートを活用した。生徒Bは同じワークシートを8月と12月に書かせたところ、「何かあったときによい方向に考える」「ものごとを手順よくすることが上手」「こうありたいという目標や理想がある」などの項目で改善が見られた（資料7）。この主な要因は、生徒の部活動や専門委員会活動での頑張りが自信につながってきたからだと思われ、保護者とは懇談で話題にすることができた。

自己理解チェックリスト		リスト	
項目	記入日	記入日	記入日
①自分は何かあった時によい方向に考えるタイプである。	5	3	1
②自分は気持ちのコントロールがうまくできる（思い通りにならなくて、さわいだりしない）タイプである。	3	2	
③自分はものごとを手順よくする（やる順番を考え、しめ切りを逆算してする）ことが上手なタイプである。	3	1	
④自分はできなかつたことを人や物のせいにせず、すなおに認めることができるタイプである。	4	3	
⑤自分は相手の気持ちやその場のふんいきを感じて行動することができるタイプである。	4	3	
⑥自分は苦手なこともあきらめずに、自分のペースでがんばろうと思うタイプである。 あなたの苦手なことは何ですか…（ 部隊 、 おもは やひやひや ）。	5	3	
⑦自分は自分の長所と短所がわかっている。 それは…長所（ えんしょ ） 短所（ たんしょ ）	4	3	
⑧自分はもう自分がいっぱいいっぱいになった時の解決方法をもっている。	3	3	
⑨自分は人の話を十分聞いていると思う。	4	4	
⑩自分は人と上手におしゃべりや話し合いができると思っていると思う。	4	2	
⑪自分は話をする時相手の表情や声色などを意識している。	3	2	
⑫自分は友人関係では特にやみではない。	5	2	
⑬自分はこうありたいという目標や理想がある。	4	2	
この中で これから 特に意識してチャレンジしたいことは何番ですか。 _____ 番	6	10	10

資料7 自己理解チェックリストの記入

参考文献：あたまと心で考えようSST（ソーシャルスキルトレーニング）ワークシート
 ~自己認知・コミュニケーションスキル編~
 編著／NPOフトウーロ LD発達相談センターかながわ
 発行所／株式会社 かもがわ出版

- ・作業的な学習：通級指導教室では生徒の反応や理解の様子によって、手立てを見直しながら指導してきた。例えば、プリントを使った指導ではわかりにくいくらいがあったので、カードを作り、自分で選ばせてホワイトボードに貼らせたり、並べかえさせたりした。このように作業的な学習を取り入れると、理解が進む場合が多くった。
- ・イメージ化：言語的な面で弱さがあると考えられた生徒に対して、生徒が興味を持ちやすいようにクラブの競技に関する短文を用意して、その読み取りやイメージ化をさせた。イメージ化のためには、そのイメージを尋ねたり、絵を描かせたりした。
- ・記憶：例えば、英語の単語を覚えるのに困っている状況を持っていた生徒に対して、パソコンでイラスト入りのフラッシュカードを作ったり、生徒自身が単語カードを作る活動を取り入れ、主体的に学習できるように工夫した。

④発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法の研究

研究授業の対象となった生徒の場合、アルファベットの指導について、英語科の教員から教材を教えてもらうことで、教科の内容を取り上げながら、特別の指導を行うことができた。

また、他の教科についても以下のような連携を図った。

- ・数学の正負の加減算の学習に、モデルを使っての計算を取り入れた。これは、オセロの駒を使って、簡単なルールで答えが出せるように考えたもので、自分で駒を動かしながら多感覚を使って考へるので、わかりやすいようであった。
- ・社会の歴史の学習では、重要語句のみを抜き出して、概要をつかませるように指導した。これは、情報量が多いと混乱してしまうからで、重要語句は時代や文化、人物、地名や建物、その他に色分けしたカードにして、時系列に沿って並べさせたりした。また、語句と語句の関係がつかめるように、まとめのワークシートを工夫した。最初は時代の順番を正しく並べられなかつたが、この指導の後で復習したときは、正しく並べられるようになった。

しかし、教科担当の教員との打合せについては、時間の確保が難しく、不十分であったと考える。通級での指導内容を考える際や、教科の専門性を生かした指導方法や教材の工夫について、校内で共有を図れるよう、特別支援教育コーディネーターとも連携を図りながら取組を進めていきたい。

【学校種：高等学校】

①通級による指導開始時における目標の設定及び適切な評価の在り方の研究

【対象生徒の決定】

本校では、4月に全教員が全校生徒を対象に、授業場面等における気になる生徒の行動等についてつまずきチェックシート（資料8-①② 別添）をつけている。このチェックシートは、生徒の実

態把握の一つの方法として、本校では、平成28年度から実施している。つまずきチェックシートは必ずしも、通級による指導を受ける生徒を抽出するために実施しているものではないが、平成29年度の文部科学省委託事業の成果として、全教員が同じ様式のシートを活用することにより、生徒の困難さを同じ視点で共有することができ、通級による指導を含む個別の支援を必要とする生徒を全校での共通理解のもと、抽出することが可能となると考え実施している。

シートの項目にチェックが入った全生徒については、通級指導担当者を含む生徒支援部の教員が中心となって2週間程度の期間を設けて、昼休みや放課後に生徒面談を行う。また、チェックシートを集計したものを全教員に配付し、校内で配慮や支援が必要な生徒について共通理解を図っている。

面談では、リラックスできる雰囲気の中で生徒とコミュニケーションを深め、生徒と課題の共有を図る。通級による指導に係る校内組織「通級による指導研究・開発プロジェクトチーム（研究PT）」が中心となり、生徒面談を通して担任等とともに、全体指導の中でそれぞれの生徒の課題にアプローチしていく手立てや方向性等を協議する。そして生徒の行動観察を通して、通級による指導が必要と考えられる生徒については、再度、生徒面談を行い、通級による指導について説明を行うとともに指導を受けるかどうかの希望を本人に確認する。その後、三者面談の機会に通級指導担当者が同席し、保護者への説明、本人及び保護者の希望を確認し、了承を得た上で、通級による指導対象者と決定する。今年度については、1年生2名の生徒に対して、放課後に加える形態で授業時間を設定し、それぞれ1時間の指導を実施した。

[対象生徒の実態把握]

通級指導担当者を中心に担任、教科担当者とともに対象生徒のつまずきチェックシートの結果や、生徒に関する情報（中学校からの引継ぎ、前年度の学年での様子等）を情報整理シート（資料9 別添）に整理し、情報を関連づけながら生徒のつまずきを分析した。また、1年生について

では、生徒が考查のふり返りを行えるようにするために、各考查の答案を綴っていくことを、学年全体で取り組んでいるが、これらの考查の答案も生徒のつまずきについて分析する資料とした分析は、研究PTを中心に担任、教科担当者とも行った。その中でアドバイザーからは、分析する視点や、必要な情報の収集内容や収集方法についてアドバイスをいただきながら、分析をすすめた。

実態把握及び生徒の課題分析の視点	
生徒 A	<ul style="list-style-type: none">・授業での行動観察・テストの回答傾向の分析 (例：語群や選択肢があっても無記入であったり、解答を書いた上から再度書き加える等、納得できないと次の問題に進めないと傾向が伺える。)・書字や視写課題、短期記憶の課題の実施
生徒 B	<ul style="list-style-type: none">・授業での行動観察・考查等での誤答分析 (例：社会科の地図を示して地名を回答する、というように視覚的な手がかりがある問題については正答率が高い。英語科は英単語が全くわからないのか、語群が示されていても、中学校1年生で習う単語についても選択ができていない、be動詞の選択問題も間違いが見られる。)

[目標の設定]

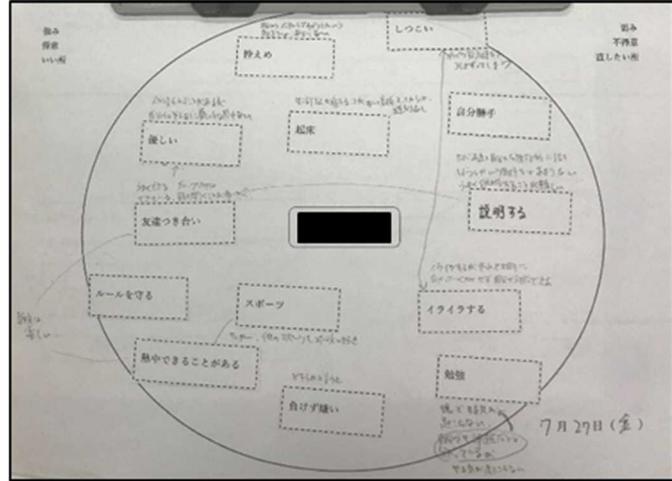
つまずきチェックシートを含めた実態把握により、得られた生徒の情報から重点的な課題を見立て自立活動の指導における目標を設定した。目標設定に際し、今年度は、アドバイザーの助言を受け、自己分析シート（資料 10）を導入した。

発達障害の高校生の課題として「勉強ができないことで将来の希望の喪失」「自己評価が低く学ぶことへのあきらめ」「意思や自主性が尊重される難しさ」「高校生としての当たり前の未確立」等が挙げられる。

（※参考 1）今回、指導を開始する前の生徒面談の中で自己分析シートを使用して、本人が自分をどうとらえているか、自分の課題はどこにあるか、何が得意かなどを確認しながら通級による指導における目標設定を行った。通級による指導を受けることの意義を本人自身が意識する上でも、青年期の高校生にとって、この手続きは大切な過程であったと考える。

生徒の実態把握で得た情報と生徒の想いを関連させながら目標設定の整理、及び指導内容の決定を行った。この自己分析シートは、指導を行う中で定期的に生徒とともに現状等を確認しながら目標、指導内容の修正に活用した。

※参考 1：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 発達障害教育推進センター研修講義
「高等学校における発達障害のある生徒の指導・支援」講義配布資料より一部抜粋



資料 10 自己分析シート

[評価]

対象生徒が決定した後、通級指導担当者が中心に担任、教科担当者からも聞き取り確認を行いながら作成した個別の指導計画（資料 11 別添）に則って評価を行う。自立活動の指導内容については、通級指導担当者が目標に基づいて評価をし、毎授業後に生徒自身も自己評価を行うようにした。また、目標設定で用いた自己分析シートについても、指導後、学期に 2 回程度評価や見直しをするようにした。通級による指導の成果が通常の学級での授業や学校生活に反映されているかどうかを評価するため、各考査終了時に、対象生徒に関わる教員（担任、教科担当者）に 4 月段階でつけたつまずきチェックシートを再度、行ってもらい、そのチェック内容も「評価」の一つと位置づけた。12 月には目標の再検討、修正を行った。3 月には、短期目標に対する評価を行い、通級指導担当者と担任を中心に年間を通じた評価として総合評価を行い、その結果は次年度の三者面談で保護者に報告し、評価と併せて保護者、本人が通級による指導を引き続き受けること、または終了することに対する意思を確認する。

②通級による指導の担当教員が通常の学級の担任との連携を深化させるための専門性の在り方の研究

この項目では、通級指導担当者と通常の学級担任、教科担当者が連携した取組や、そのシステムづくり等について記述し、指導内容や実際の取組の様子は項目④に示す。

通級指導担当者としては、通級による指導の内容やその成果が、生徒の在籍する通常の学級での生活や授業にどう反映されているか、また、生徒自身や関わる教員が通級による指導を通して、

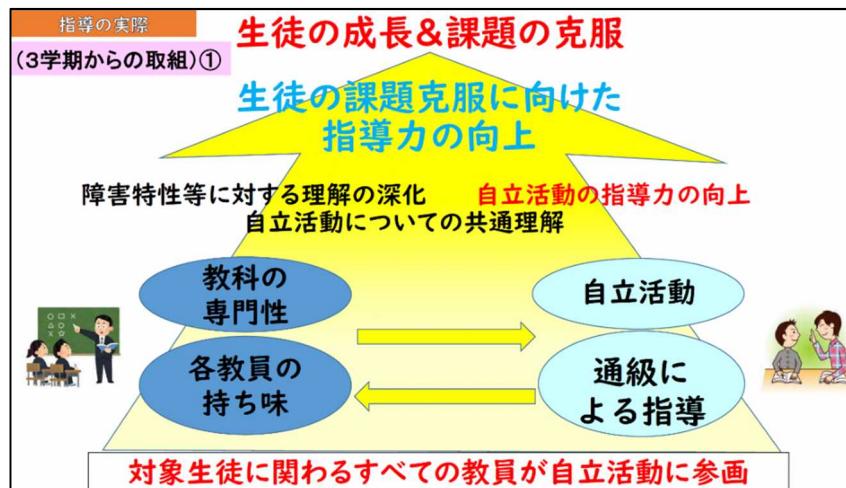
生徒の成長をどう感じているか、を課題として捉えていた。

この課題に対して、アドバイザーから、今後、教科担当者の専門性と特別支援教育の専門性を合わせていくことで、通級による指導の充実及び通常の学級の授業改善につながっていくのではないかというアドバイスを受け、3学期より研究PTでその指導の在り方について検討を行った。具体的には、対象生徒に授業で関わる教員に協力を依頼し、「自立活動」の時間に通級指導担当者とともに指導に参画する取組を進めた。この取組を進めるにあたっては、研究PTで検討を行い、この取組による通級による指導と通常の学級での指導の連携の在り方やその成果について話し合いを重ねた。そして、次に示す3つの観点で連携の在り方や期待される成果を整理した。

1点目は「通級による指導の充実」である。日頃から教科の授業で対象生徒に関わる教員が自立活動に参画することで、

- 1) 教員間での自立活動についての共通理解が広がる
- 2) 教員間での生徒の障害特性等に対する理解が深まる
- 3) 対象生徒をより多面的に捉えることができたり、教科を取り入れた指導の

工夫など通級指導担当者自身の自立活動の指導力が向上する。



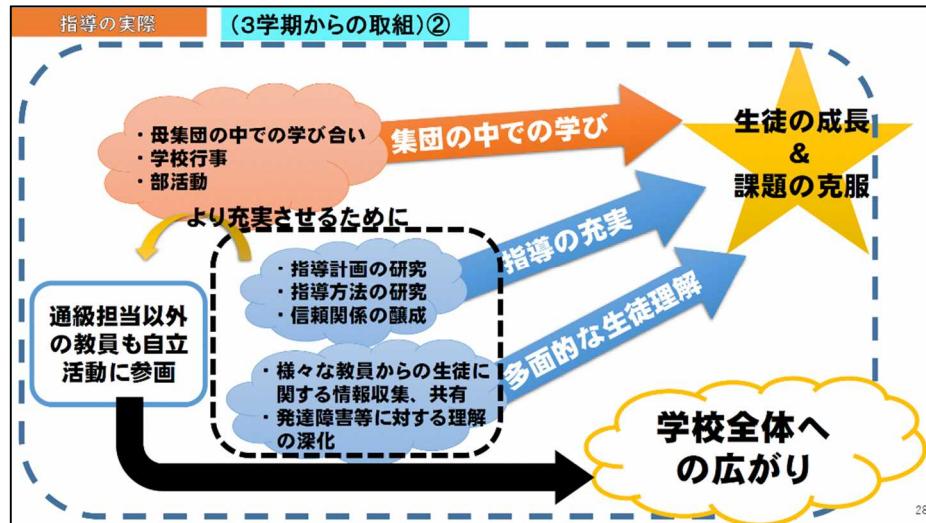
【スライド①】

といった3つの効果が期待される。このことは、通級による指導の指導場面だけでなく、多くの教員が生徒に関わるいろいろな活動の中で生徒の課題克服に向けた教員自身の指導の工夫につながり、結果として生徒の成長につながっていくと考えている。(スライド①参照)

2点目は「キャリア教育の側面から見た生徒の成長」である。

本校では、地域社会の中核を担う若者を育てるという学校目標のもとキャリア教育を主軸として「独り立ち」でき「つながる」ことができる若者を育てることを目的として、学校生活から社会生活へスムーズに移行できるように社会生活をよりリアリティのあるものとして捉え、他者との関わりや自己を研鑽していくことに喜びが感じられる経験ができるよう3年生が有田中央高校生として熱い思いを後輩に伝える「生きる会」、卒業生を含む地域の方が「仕事への思い」や「自らの生き方」を生徒と語り合う「生き方取り方ゼミ」などを通して自身の生き方や在り方を考える取組が行われており、それに向けて各学年で目標を設定し取組が計画され実践されている。

キャリア教育や教育課程検討に関わっている教員から、通級による指導での生徒の成長には、教員による多面的な生徒理解、個に対する指導の充実、生徒自身の集団の中での学びの経験が重要であることが指摘された。今回の取組を行うことで教員の多面的な



【スライド②】

生徒理解や、生徒一人一人に対する指導をより充実させることができると期待できる。また、生徒自身が集団の中での学びの経験をより充実させることにもつながり、生徒の成長が、教員の生徒を見る視点や生徒へのアプローチにおける「特別支援教育の観点」をより充実させ、その観点（考え方）が学校全体への広がりにつながるとの考えが出された。（スライド②参照）

3点目は「通級による指導の成果の普及」である。

研究PTメンバーである生徒支援部長・特別支援教育コーディネーターの教員から、通級による指導の対象となる生徒は、今までの学校生活の中で、一斉授業では学習についていけない、わからない状態で過ごしていることが想定され、学習への意欲が低下しているのではないか、ということが指摘された。そして、通級による指導での個別指導を通して、学習意欲の向上にはつながっているが、いざ、一斉授業の中で、通級による指導の成果を実感できているか、という課題が出された。今回の取組を進める中で、対象生徒に各教科を指導する教員が通級指導担当者とともに、教科指導の専門性を活かして各教科の内容を取り扱いながら「自立活動」を行うことで、生徒自身ができることの理解を得、教員との信頼関係が深まることが期待できるのではないか、とい



う考えが提案された。生徒は、一斉授業の中で教科担当教員から自分自身の成長を感じ取ってもらえることで、生徒の自己有用感の醸成にもつながる。また、教科担当教員自身も通級による指導に関わることで特別支援教育の観点から教科の指導を捉える経験ができ、その経験が、一斉授業の中でも個々の実態を踏まえた授業づくりにつながり、通級による指導の対象生徒だけでなく、集団の中で何らかのつまずきを抱えている生徒にとっても安心して学習に向かう一助となるのではないか、と考えた。(スライド③参照)

通級指導担当者は「自立活動」に参画する教員と、個別の指導計画をもとに、生徒について再度情報を共有し、指導内容、教材について協議を行い、取組を進めた。

なお、教員との連携を図る上という点については、本校には、これまで特別支援教育の観点を「学校改革」に取り組んできた強みがある。学校全体の取組として生徒にとって安心感と希望がもてる居場所としての学校作りや創意工夫の観点を共通化した授業作り、教室のユニバーサルデザイン化等、生徒が安心して、落ち着いて学べる環境作りといった取組を多面的・重層的に進めてきた。

(授業づくり創意工夫の 5 観点)

1	授業開始時に学習への見通しを持たせる工夫
2	わかりやすい言葉（説明・発問）と視覚的な表示への工夫
3	生徒同士の学びあいを活発にするための工夫
4	学習場面の転換や多様な学習活動への工夫
5	学習環境（規律・けじめ）への工夫

例えば、入学後、高校生活につまずきやすい1年次の生徒は20人程度の少人数HRを編成することで、生活指導、学習指導の両面で教員が生徒に十分に関われる体制を整えた。また、多くの生徒にとって苦手意識の強い英語、数学、国語については、毎朝10分間の学び直しを主とした「朝学」を3年間全員必修として行ってきた。平成30年度は、入学してきた1学年で学力に課題のある生徒を対象として週2回、放課後に学年の全ての教員が交代で担当しながら、教科学習の学び直しを行う取組を始めた。(通称「アリ勉」)このように、学校全体として生徒たちの実態に合わせた多層的な取組が実践されており、校内で、生徒の支援・指導において様々な連携のかたち取り入れられている。今後、さらに連携を深化させていくために、通級による指導に関わる教員の複数化や担当者の専門性の向上が課題と考える。

③発達障害による学習上又は生活上の困難の改善・克服を目的とする指導方法の研究

【指導事例 1 生徒A】

○対象生徒の実態と目標

聞いた情報などを記憶していくことが難しく、忘れ物や紛失物が多い。本人自身も忘れ物に対しては、自分の課題として認識はしている。

メモの取り方など自分で確認する方法を身につけることを重点課題として指導を行った。

○指導内容

メモの取り方の指導として、まず自分にとって使いやすいメモ用紙について考え、1日が1ページになったメモ帳に付箋をつけて毎日チェックする方法で取組を進めた。また、家庭と連

携し持ち物チェック表を作成して家の玄関に置いて確認するようにした（資料12）。

しかし、三者面談で、保護者から生徒の生活のリズムが乱れているという話が出され、なかなか定着に結びつけていくことができなかった。アドバイザーからも「本人が納得してやらないとメモを取ることの定着ははかれないのではないか」というアドバイスを受けた。忘れ物と自分の生活との関連性を「見える化」するために、生活記録表を使って本人と確認していくようになるなど、今後、メモをとることの有効性を意識できる取組を設定していきたいと考える。

(資料 13 別添)



資料 12 当初使用した教材

ポイント

1 週間単位で自分の生活リズムと忘れ物の頻度を自分で見てわかるようにすることと、1日ごとのふり返りをすることで自分の生活についての見直しを生徒と一緒にしていくことができる

資料 13 改良した教材

書字については、各教科担当者から「授業中にノートがとれていないことが多い」という情報が挙げられていた。通級指導担当者による授業参観、本人及び教科担当者からの聞き取りの中で、個別指導の場面では、書くスピードは遅いものの時間内に書くことができていた。本校では前述したように、通常の学級の授業改善にも取り組んでおり、どの授業においても、生徒が今、何をするべきか活動をわかりやすくするため、「書く時間」「聞く時間」等明確にして授業を組み立てている。生徒Aが授業中、ノートがとれないのはなぜか、研究PTで協議し、教員の口答での指示だけでは、指示の内容を行動にうつすのに時間がかかり、行動が遅れてしまっているのではないかという意見が出された。「ノートを書く」、「話を聞く」等の指示を示したカードを作成して、授業中、生徒Aの机上に置いておき、教員の指示を生徒自信が確認できるように、通級による指導の時間において、生徒と授業中のカードの使用について確認を行った。生徒自信が授業中に教科担当者とカードを使って活動の判断ができるか確認を行い、実際の授

業の中でも取組を進めた。生徒と教科担当者両者から、以前よりノートを書くことができるようになった、という評価があった。当初は、数学の授業中だけに導入していたが、本人から他の教科でも活用できると意思表示があり、他教科でも取組を進めた。なお、本生徒については、年度途中、入院を余儀なくされ、本人の体調面を考慮して放課後時間帯の指導を継続して取り組めなかつた。来年度に向け、本人の体調も考慮しながら、取組を継続（再開）していきたいと考えている。

【指導事例2 生徒B】

○対象生徒の実態

学習面で困難さが見られ、本人も学習に対して苦手意識がある。自己分析シートの記入の中で、自分の弱みとして「勉強」を挙げていて、やっても仕方ないというような発言が聞かれたり、後ろ向きな発言が多かった。

○指導内容

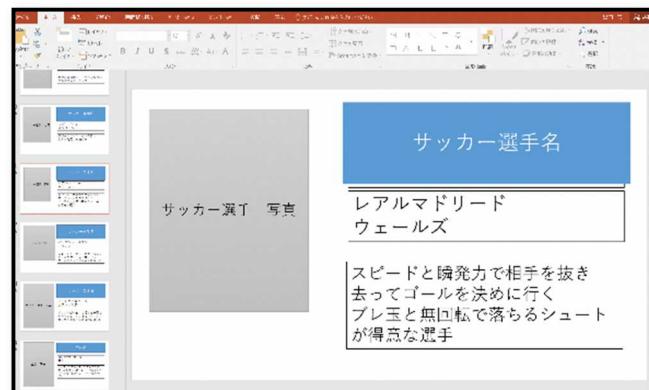
生徒Bの指導では、生徒自身が自分の得意なこと、苦手なことを知り、学び方を工夫することで、学習内容を定着させることを重点課題として指導を行った。

まずは、パワーポイントを用いて、自己分析として生徒が興味のあるサッカーを題材にして、「サッカー選手を紹介してみよう」という取組を行った。有名選手について、サッカースタイル等を紹介するスラ

イドを作成した（資料14）。加えて、自分自身のスライドを作成し、サッカースタイルや、今、自分のできていること、目標に向かって今すべきことは何かということを考える取組を進めた。その中で、生徒の興味のあるサッカーにおいて自分の良いところや、今の課題、目標を見つけていく活動を通して、学校生活、特に学習面においても同じ形でできていることと頑張っていること、頑張らないといけないことを確認していくことができ、勉強することについても意識が少しずつ向かうことができた。

考查の解答の分析から、例えば、地理では、日本地図は都道府県を全て覚えていて、視覚情報のあるものやエピソード的に意味づけしやすいものについては記憶しやすいことが考えられた。

授業での行動観察では、英語の時間には、アルファベットは一文字ずつなら読めるが、単語になると音との意味づけがわかっていない。例えば「book（ブック）」等日常的に使われている単語については、「ブック」と言われると「本」をイメージすることができているが、音と単語が一致しておらず、英語で書かれた単語（book）を見ても「ブック」と読むことができず、意味を想起することができない、覚えることができないという実態が見られた。また、書く活動ではなかなか単語をかたまりと捉えられないので、活動と視覚的な手がかりを使って学習していく方法を取り入れることにした。単語カードにアルファベットカード一文字ずつを貼って単語を作っていく、視覚的なイラストを使って意味の理解に取り組んだ（資料15）。アルファベットカードを貼っていくことで、アルファベットの繰りを意識して学習でき、生徒Bからは「覚えやすいし、単語帳にしていくことで授業やテスト勉強で使ってみたい」と授業後の自己評価の中で感想に書かれていた。



資料14 自己分析に用いた教材

読みについては、英語担当者にも相談し、本生徒の場合、フォニックスを用いることで単語の読みについて、語想起しやすくなるのではないか、とアドバイスを受けた。

生徒Bはこれまで英語で書かれた英単語を見て「この単語はわかる?」と問われても「わからない」ということが多かったが、フォニックスのルールカードを見て答えようとするなど、自分なりに「わかる」という経験を重ねることが自信となってきた。

併せて生徒Bは、前述した「アリ勉（学年で学力に課題のある生徒を対象にして行っている放課後の教科学習）」にも参加している。「アリ勉」で、周りの友達の頑張っている姿に刺激を受け、自分も頑張らないといけないという気持ちが高まってきた様子が通級による指導の場面でもうかがえた。個別の指導計画に基づく担任、教科担当者の評価においても学習への意欲が高まったという評価が多く教科担当者から挙がってきたことが指導の成果と考える。



資料 15 英単語を用いた教材

④発達障害の状態に応じた各教科の内容を取り扱う際の「特別の指導」方法の研究

項目②に示した取組の具体的な指導内容については以下のとおりである。

生徒の課題	取り扱う各教科の内容	指導の様子や成果
アルファベットは読めるが、単語になると音との意味づけがわからっていない。そのため英語が理解できず授業についていけていない。	【英語】フォニックスの教材（書いて覚える楽しいフォニックス マガジンランド）を使って、声に出したり、体を使ったり、多感覚を使って英単語の読みに取り組んだ。	対象生徒の実態に合った学習方法で生徒自身もできたと実感でき学習に取り組んでいた。また教員もこのような方法が対象生徒には合っているのだと共通理解を図ることができた。

<p>出来事を順序立てて整理する。 自分の気持ちを言葉で表現する。</p>	<p>【芸術科（書道）】インターンシップの感想やお礼状の作成を通じて、体験した出来事のふり返り等に取り組んだ。</p>	<p>学年で取り組んだインターンシップを通して、自分のできたこと、頑張ったこと、教師から見て頑張っていたことのふり返りを行うことができた。</p>
	<p>【国語】シンキングツール（マインドマップ）を用いて、自分の思っていることや考えていることを出してみようというねらいで取り組んだ。</p>	<p>楽しかったことをテーマにしたり、学校生活場面、今回は、学年末テストをテーマにして意見を出す取組を行った。その中で自分の中で納得して、今自分がしなければいけないことを導き出すことができた。</p>

他にも、数学担当者との取組では、集合の学習を取り扱い、生徒の興味のあるサッカーを例えに挙げて説明することで、数字だけではわかりにくいことも具体的にイメージしやすく理解することができていた。

理科担当者との取組では、勉強の仕方として暗記用シートを用いた勉強法について理科の授業でのワークやプリントを使って指導を行い、本人もすぐに活用してテスト勉強に取り組んでいる姿が見られた。

今回、「自立活動」の指導にあたった教科担当教員から「生徒の実態について理解が深まって一斉授業の中での指導の参考になった」という感想もあり、通級指導担当者と連携した取組は一斉授業の中で、生徒一人一人を見る授業作りについて考えてもらうきっかけとなったと考える。今後教科担当教員との連携を深め、校内全体の授業改善の充実にもつなげていけるよう取組を進めていきたいと考えている。

6. 今後の課題と対応

本事業では、アドバイザーの指導・助言を受け、通級による指導の充実に努めてきた。拠点校では、個別の指導計画様式に教科担当者が参画できる仕組みを導入し、取組を進めているものの、一年間を通じての評価内容の分析には至っておらず、妥当性の検証が課題となっている。加えて、中学校・高等学校では、小学校に比べ、通級指導担当者と学級担任、教科担当者との連携の難しさなど校内の支援体制づくりや、それぞれ3年間の学校生活の中で、通級による指導の役割を明確化することが課題であると考える。生徒自身の学校生活全体を見据え、通級による指導に意欲的に取り組めるよう、指導内容や指導時間の設定についても、研究を深める必要がある。

また、高等学校においては、通級による指導の時間を放課後に設定するが多く、通級で身に付けた力を生徒が在籍する通常の学級で発揮できる支援体制が必要である。併せて、本県では、中学校で特別支援学級に入級している生徒や、通級による指導を受けている生徒に対して、「つなぎ愛シート（和歌山県版個別の教育支援計画）」の作成を進めており、平成30年度卒業生から、本人・保護者の了解を得て、進学先につなぎ愛シートを送付するシステムを整備した。中学校から高等学校へ進学したほとんどの生徒は通常の学級で指導を受けることとなる。通級に

による指導を実施する学校を中心に、通級による指導で得られた知見を通常の学級におけるどの生徒にとってもわかりやすい授業づくりに生かし、県内すべての高等学校において、通常の学級における授業改善を進める気運の醸成が必要である。今後も引き続き、以下の内容について実践的な研究を継続したいと考える。

- 通級による指導を受けている生徒の多面的な評価方法の研究
- 通常の学級の授業改善につながる通級による指導内容・方法に関する研究
- 通級による指導担当者を支援するための地域ネットワークシステムに関する研究

7. 拠点校について

(中学校)

指定校名：湯浅町立湯浅中学校													
	第1学年			第2学年			第3学年			特別 支援 教育 支援 員	スク ール カウ ンセ ラー	その他	計
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数				
通常の学級	114	4	95	3	93	3							
特別支援学級	2	2	1		0								
通級による指導 (対象者数)	2		2		1								
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員					
教職員数	1	1	0	2 2	1	0	3	1	0	1	5	3 5	

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：1

※特別支援学級の対象としている障害種：知的障害、自閉・情緒障害

※通級による指導の対象としている障害種：発達障害

(高等学校)

拠点校名：県立有田中央高等学校					第1学年		第2学年		第3学年		第4学年	
課程	学科				生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	総合学科				109	5	127	5	136	5		
通級による指導 (対象者数)					2		0		0			
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別 支援 教育 支援 員	スク ール カウ ンセ ラー	その他	計
教職員数	1	1	0	4 4	1	0	8	4	0	1	1	6 1

※特別支援教育コーディネーターの配置人数：1

※通級による指導の対象としている障害種：発達障害

8. 問い合わせ先

組織名：和歌山県教育委員会

- | | |
|-------------|-----------------------------------|
| (1) 担当部署 | 和歌山県教育庁学校教育局県立学校教育課特別支援教育室 |
| (2) 所在地 | 和歌山市小松原通1-1 |
| (3) 電話番号 | 073-441-3683（直通） |
| (4) FAX番号 | 073-441-3652 |
| (5) メールアドレス | （課代表）e5002001@pref.wakayama.lg.jp |